

仲間からの拒絶経験と将来展望が非行 および向社会的行動に及ぼす効果^{1,2)}

中 川 知 宏*・斎 藤 綾 香**

問 題

近年、少年犯罪がマス・メディアの注目を浴びている。1997年に起きた神戸連続児童殺害事件を契機に、2000年の九州バスジャック事件や2005年に大阪で起きた小学校教師殺害事件などは社会に大きな波紋を投げかけた。しかし、こうした猟奇めかた凶悪な事件は非常に稀なケースであり、少年犯罪の全体像を俯瞰すると、窃盗や横領が検挙人員の大半を占めている（犯罪白書、2005）。その他、青少年の行動として問題となるのは非行のような法律に抵触する行為ではないが、未成年の行為としては社会的に望ましくない喫煙や飲酒のような不良行為である。青年期の少年はこうした行動に関与する一方で、学校の行事や地域活動のような向社会的行動にも携わる。本研究では、こうした背景に基づき、非行や不良行為のような反社会的行動と向社会的行動が生起するメカニズムを仲間からの拒絶経験と将来展望の観点から検討する。

非行や不良行為のような反社会的行動の発生過程を解明するために、多くの研究者が様々なアプローチを行ってきたが、非行と最も関連のある要因の一つとして注目されてきたのが仲間からの拒絶経験（peer rejection；以下、拒絶経験と表記）である。家庭裁判所調査官研修所（2001）によると、多くの非行少年は仲間からの拒絶経験があり、中には長期的拒絶によって自尊心が著しく低下した少年もいると指摘する。このような仲間からの拒絶経験は心理的側面、行動的側面の双方に影響を及ぼす。前者は、抑うつ状態や孤独感の増大（Parkhurst & Ascher, 1992）を招き、後者では学業成績の低下（Wentzel & Asher, 1995）や後の攻撃行動・非行の増加（Asher & Coie, 1990；Miller-Johnson, Coie, Manumary-Gremaud, Lochman, & Terry, 1999）を引き起こす。

拒絶経験に基づく非行の発生過程は2つの観点から説明することができる。第一は社会的スキルの欠如に依拠するものである。社会的スキルは仲間との関係の中で形成されるが、仲間からの

* 東北福祉大学総合福祉学部 ** 東北大学教育学研究科

¹ 本研究は第二著者が東北大学文学部に提出した卒業論文の一部を加筆・修正したものである。

² データを収集するにあたり、東北工業大学の青木俊明先生、東北大学の金地美知彦さん（現所属：八戸大学）、八田武俊さん（現所属：岐阜医療科学大学）、鈴木美穂さん、齊藤高史さん（現所属：株式会社ファインド・シー）、河地庸介さん、河島三幸さん（現所属：株式会社カネボウ化粧品）、佐藤かおりさん（現所属：USEN 株式会社）に御協力いただきました。心より感謝を申し上げます。

拒絶を受ける少年は社会的スキルを獲得することが困難であるため、他者との適切な関係を維持することができず、非行に関与するというものである。第二は、仲間からの拒絶が孤独感、抑うつ、疎外感などのネガティブな感情反応を促進し、少年は他者の行為に対して敵意を帰属するようになる。こうした結果、将来的に攻撃的手段で他者に報復するといった反社会的行動が生起するというものである (Dodge, Lansford, Burks, Bates, Pettit, Reid & Price, 2003)。したがって、以上の議論から次の仮説を導くことができる。

仮説 1-a 仲間からの拒絶経験が多い者は少ない者に比べて、非行に関与する頻度が高いであろう。

また、少年は非行や不良行為のような反社会的行動にのみ関与するわけではなく、地域のボランティアや学校行事のような向社会的行動にも関与する。このような行動は他者にとって有益であるかどうかという点において対極的な位置にある。したがって、向社会的行動については次のように予測することができる。

仮説 1-b 仲間からの拒絶経験が多い者は少ない者に比べて、向社会的行動に関与する頻度が低いであろう。

しかしながら、拒絶を受ける少年が全て非行に関与するわけではなく、これを調整するもう一つの要因を考慮する必要がある。本研究は、研究対象として高校生に焦点を当てており、彼らは大学等への進学や就職など自分の将来を考える重要な時期にある。しかし、高校生の中には将来を考え目標を明確に持つ者もいればそうでない者もいる。このような将来に対する認知の仕方を含む、ある時点における個人の心理学的過去および未来についての見解の総体を時間的展望 (time perspective) と言う (Levin, 1951)。

時間的展望は様々な研究者が扱ってきたものの、その概念や構造は一貫しないことが多かったが、白井 (1994a) は時間的展望に関するレビューの中で、Hubert & Lens (1988) の指摘に基づき、時間的展望を4領域にまとめた。第一の領域は時間的指向性 (time orientation) であり、個人の時間的関心が過去、現在、未来のどの次元に向いているかということを示すものである。第二の領域は時間的態度 (time attitude) であり、個人の過去・現在・未来に対する肯定的あるいは否定的態度を指す。第三の領域は狭義の時間的展望であり、これは広がり (過去あるいは未来において個人が関心を向けている時間的範囲の長さ)、密度 (ある期間内で個人が持っている目標や関心事の数)、構造化 (将来の目標や関心事が複数あった場合にその時間的順序が保たれているか)、現実性 (将来の目標や関心事に現実に到達できる程度) の4つを含む。そして、第四の領域は狭義の時間知覚であるが、これは時間の経過速度に対する判断と定義され、時間的展望の定義

Table 1. 時間的展望の構造

質的側面	時間的志向性	個人の時間的関心が過去・現在・未来のどの次元に向いているか
	時間的態度	個人の過去・現在・未来に対する肯定的・否定的態度
構造的側面	広がり	過去あるいは未来において個人が関心を向けている時間的範囲の長さ
	密度	ある期間内で個人が持っている目標や関心事の数
	構造化	将来の目標や関心事が複数あった場合に、その時間的順序が保たれているか
	現実性	将来の目標や関心事を実現可能と認知している程度

白井 (1994a) を一部改変

とはやや異なるため、本研究では時間的展望の構成について時間知覚を除く3領域とした (Table 1)。このように時間的展望とは複数の次元から構成される概念であるにもかかわらず、これらは今まで独立して扱われることが多かった。したがって、時間的展望の構成要素を総合的に扱う必要がある。そこで、我々は上記の概念分類に基づき、3領域を構造的側面と質的側面の2つに再分類した。前者は時間的展望の骨格を構成するものであり、これには広がり・密度・構造化・現実性を含む。後者は時間的展望の中でも将来的な見通しの明るさや、将来目標に対する現在の投資効果に関する予測などを表しており、時間的態度と時間的志向性を含む。このような時間的展望の質的側面と構造的側面はそれぞれが独立した機能として作用するのではなく、これらの相互作用的機能を仮定している。Table 2 に示すように、最も時間的展望の統合性が高い者は構造的・質的側面の双方が高く、逆に、統合性が最も低い者は双方共に低いということになる。また、どちらか一方の側面が高く、どちらか一方の側面が低い者は中間的位置にあるといえるだろう。時間的展望の統合性が高い者ほど将来について考えたり、目標に向かって努力する傾向があり、統合性が低い者は目標を持たず、将来に対して悲観的な傾向がある。

それでは、なぜ時間的展望が非行を抑制するのだろうか。自己拡張モデル (McLaughlin-Volpe, Aron & Lewandowski, 2005) によれば、人は基本的動機として自己拡張欲求を持つという。これは物質的資源や社会的資源、考え方、アイデンティティへのアクセスを獲得・拡大することによって潜在的な自己効力感を促進するための欲求である (Aron & McLaughlin-Volpe, 2001)。これらの社会的資源にアクセスするには親密なパートナーや集団内で信頼関係を築き、そ

Table 2. 時間的展望の統合性

		構造的側面	
		高	低
質的側面	高	統合群	中間群
	低	中間群	非統合群

れを維持する必要があるが、個人がそのような社会的資源にアクセスしようとするかどうかは、自分の将来についての関心や目標を持っているか否かに依存するだろう。したがって、本研究では時間的展望の中でも、特に未来的側面である将来展望 (future perspective) に焦点を当てる。現実的な将来目標を明確に持ち、それを実現するために努力する者は、目標を達成するために推薦状や卒業証書、または教師の信頼といった資源にアクセスしようとする。しかし、非行に関与した場合、停学や退学のような制裁を受け、これらへのアクセス可能性が低減する。したがって、将来展望の統合性が高い者はそうでない者に比べて非行を抑制すると考えることができる。これらの議論から、以下の仮説を導出することができる。

仮説 2-a 将来展望の統合性が高い者は低い者に比べて、非行に関与する頻度が低いであろう。

仮説 2-b 将来展望の統合性が高い者は低い者に比べて、向社会的行動に関与する頻度が高いであろう。

仮説 3-a 拒絶経験が多い場合、将来展望の統合性が高い者は、低い者に比べて非行に関与する頻度が低いであろう。

仮説 3-b 拒絶経験が多い場合、将来展望の統合性が高い者は、低い者に比べて向社会的行動に関与する頻度が高いであろう。

以上の議論より本研究では、これらの仮説に基づき、拒絶経験と将来展望が非行や向社会的行動に及ぼす効果を検討することを目的とする。

方 法

調査対象者

仙台市内に通う大学生、専門学校生計 224 名 (男性 127 名、女性 97 名)。今回は、男性のみを対象に分析を行なった。男性の平均年齢は 19.7 歳。

調査票

本研究では調査対象として高校生期を想定したため、質問紙では高校時代の体験を想起しながら回答させる回想法を用いた。

拒絶経験については 10 項目から成り、独自に作成した (項目の詳細については Appendix を参照)。将来展望は質的側面と構造的側面から構成されるが、前者は時間的態度と時間的指向性を含む。これらについては時間的展望体験尺度 (白井, 1994b) と時間的展望尺度 (東江・石川・嘉数, 1984) の内、将来展望に関する項目のみ抜粋し、尺度を再構成した。後者は広がり、密度、構造化、現実性を含む。回答者は高校生の時に持っていた将来の夢や目標を全て記述し、各々につい

て実現可能性と目標実現時の予想年齢を記入するよう求めた。そして、調査票の最終頁で再度、目標および目標実現時の予想年齢を記述するよう求めた。目標実現年齢の内、最も高い年齢を「広がり」、目標数を「密度」、1回目と2回目の目標達成順序の一致率を「構造化」、各目標の実現可能性を「1. 全く不可能」～「4. 可能性は高い」の4点尺度で尋ね、それらの評定平均値を「現実性」とした。非行の測定に関しては、不良行為（9項目）と非行（7項目）の2下位尺度から成り、向社会的行動については12項目から構成されるが、菊池（1988）の作成した向社会的行動尺度（大学生版）を基盤に学校という文脈を考慮して項目を再構成した。これらの変数の内、拒絶経験と将来展望の質的側面に関しては「1. 全く当てはまらない」～「6. 非常に良く当てはまる」の6点尺度を用いて評定を求めた。不良行為、非行に関しては「0. 全くない」～「5. ほとんど毎日」、向社会的行動に関しては「0. 全くしなかった」～「5. よくしていた」の6点尺度を用いて評定を求めた。

結 果

尺度の分析

まず、初めに各尺度の記述統計量を見ると（Table 3）、拒絶経験については平均値が1.90で中点（3.5）点を下回っており、回答者の多くは仲間から拒絶された経験が少ないことを示している。将来展望の質的側面である時間的志向性の平均値は3.19、時間的態度は3.54で中点（3.5）点を上回っており、回答者は将来の目標に向けて努力し、自分の未来を肯定的に捉えていたことが示されている。将来展望の構造的側面を構成する密度の平均値は2.79、広がり30.84、現実性は2.91、構造化は0.63であった。これは回答者が高校時代に持っていた目標は平均的に3つほどで、30歳ぐらいまでの未来を想定していたことを示している。また、目標の現実性も伴い、一貫していたことが示されている。

次に、各尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ仲間からの拒絶、

Table 3. 各変数の評定平均値、標準偏差、信頼性

	<i>M</i>	<i>SD</i>	α
仲間からの拒絶	1.90	0.82	.87
将来展望（質的側面：時間的志向性）	3.19	0.90	.57
将来展望（質的側面：時間的態度）	3.54	1.06	.77
将来展望（構造的側面：密度）	2.79	1.25	—
将来展望（構造的側面：広がり）	30.84	14.47	—
将来展望（構造的側面：現実性）	2.91	0.71	—
将来展望（構造的側面：構造化）	0.63	0.45	—
不良行為	1.21	1.02	.83
非 行	0.30	0.45	.70
向社会的行動	2.44	0.94	.84

不良行為、向社会的行動については.80以上の高い信頼性を示し、時間的態度と非行については.77と.70でやや低い値であるものの概ね満足すべき水準であった。しかし、時間的志向性については.57で低い値であった。将来展望の構造的側面については、それぞれ1項目のみで測定しているため、信頼性は算出していない。

仮説の検討

初めに、拒絶経験について中央値(1.7)を基準に高拒絶経験群($N=68$)と低拒絶経験群($N=64$)の2群に分類した。また、将来展望については、質的側面と構造的側面のそれぞれにおいて、統合群と非統合群の二群に分類した。このうち質的側面の統合性の群分けに際しては、時間的態度と時間的指向性の平均値を算出し、中点の3.5点を基準に、3.5未満を低群、3.5以上を高群とした。また、構造的側面については、「広がり」「密度」は中央値(27; 3)で、「構造化」「現実性」は中点(0.5; 2)でそれぞれを2群に分類した。そして各低群を0点、高群を1点として加算し、4点中0点～2点を低群、3～4点を高群とした。各側面の高群、低群の組み合わせで質的側面・構造的側面ともに統合性が高い回答者を統合群($N=31$)、統合性が低い回答者を非統合群($N=41$)とし、2側面の内、どちらか一方の統合性のみが高い回答者を中間群($N=51$)とし、3群に分類した。

次に仮説を検討するために、拒絶経験(2)と将来展望(3)を独立変数とし、非行と不良行為、向社会的行動をそれぞれ従属変数として分散分析を行った。その結果、不良行為については、拒絶経験の主効果が有意であったが($F(1, 122)=4.97, p<.05$)、仮説とは逆に拒絶経験の少ない回答者は多い回答者に比べて不良行為に關与する頻度が高かった(Figure 1)。また、向社会的行動

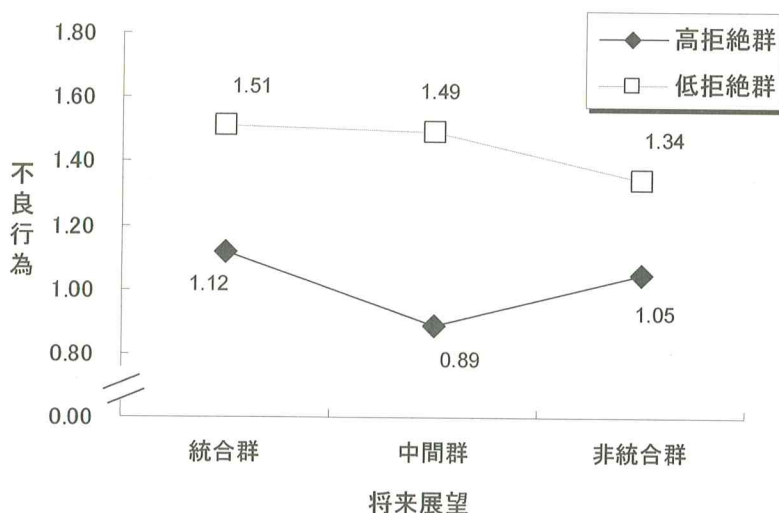


Figure 1. 拒絶経験と将来展望が不良行為に及ぼす効果

については将来展望の主効果が有意であった ($F(2, 122) = 16.70, p < .01$)。その後、多重比較 (Scheffe 法) を行った結果、全ての群間に有意な差が見られ、将来展望の統合性が高い回答者ほど向社会的行動を行なう頻度が高かった (Figure 2)。しかし、交互作用効果は見られなかった。一方、非行についてはいずれの効果も見られなかった。こうした結果が生じた原因は、拒絶経験と将来展望が各行為に独自の効果を及ぼすためではないかと考えられる。

そこで、補足的に拒絶経験と将来展望が各非行・不良行為に及ぼす効果を検討するため、非行・不良行為の各行為について拒絶 (2) \times 将来展望 (3) の分散分析を行なった。その結果、「飲酒」、「賭け事」、「無免許」については拒絶の主効果が有意であり ($F(1, 122) = 8.27, p < .01$; $F(1, 122) = 5.40, p < .05$; $F(1, 122) = 11.13, p < .01$)、「脅迫」「深夜徘徊」「無断外泊」については拒絶

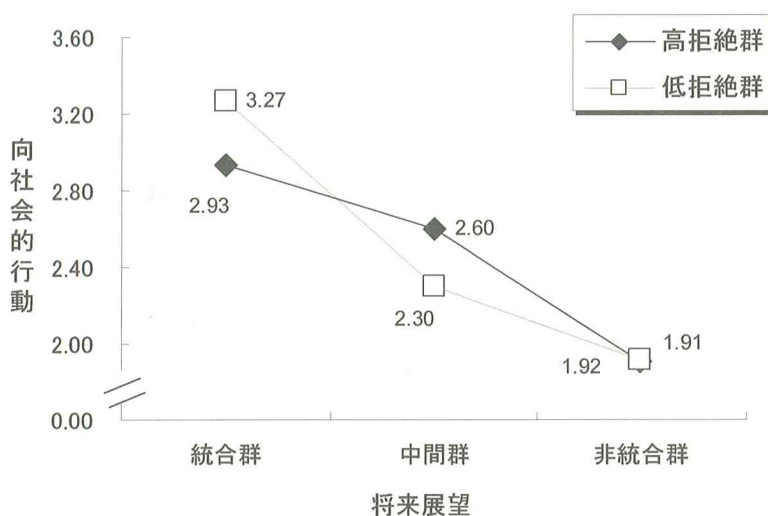


Figure 2. 拒絶経験と将来展望が向社会的行動に及ぼす効果

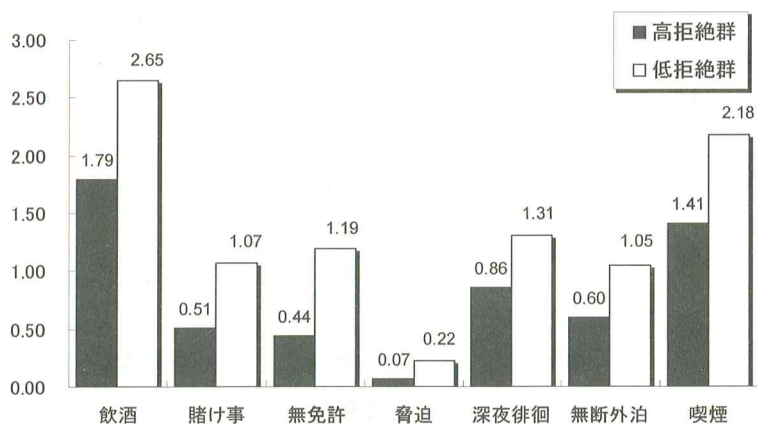


Figure 3. 拒絶経験が各非行・不良行為に及ぼす効果

の主効果が有意傾向であった($F(1, 122)=3.12, p<.10$; $F(1, 122)=2.95, p<.10$; $F(1, 122)=2.84, p<.10$)。これは拒絶経験が少ない回答者の方が、多い回答者に比べてこれらの行為に関与する頻度が高かったということを示している (Figure 3)。一方、将来展望の効果は見られなかった。交互作用については「喫煙」に有意傾向が見られ ($F(2, 121)=2.51, p<.10$)、「カンニング」は有意であった ($F(2, 122)=10.01, p<.05$)。単純主効果の検討を行ったところ、前者については将来

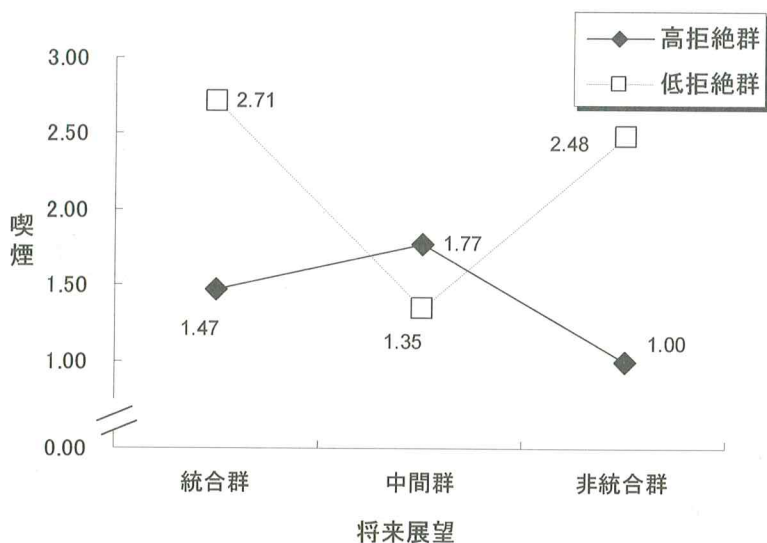


Figure 4. 拒絶経験と将来展望が喫煙に及ぼす効果

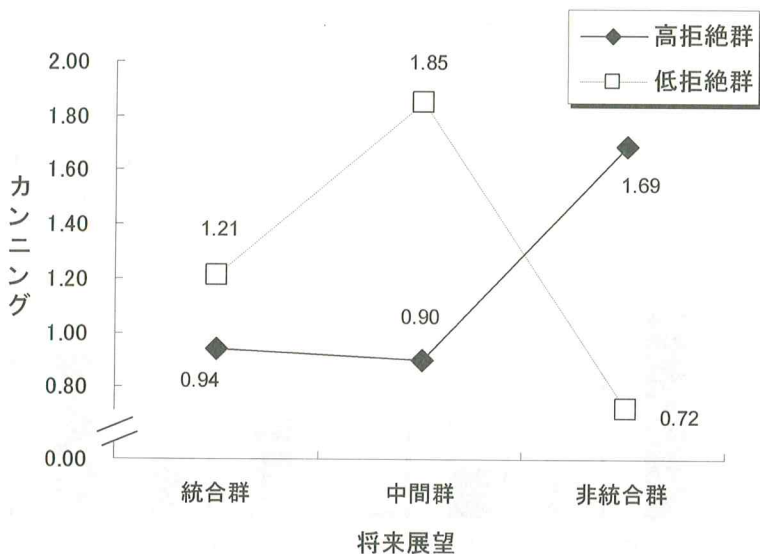


Figure 5. 拒絶経験と将来展望がカンニングに及ぼす効果

展望の非統合群において、低拒絶経験群は高拒絶経験群に比べて喫煙する頻度が高かった ($F(1, 116) = 4.65, p < .05$; Figure 4)。また、後者については将来展望が非統合群の場合、高拒絶経験群は低拒絶経験群に比べてカンニングの頻度が高かったが ($F(1, 117) = 4.03, p < .05$)、将来展望の中間群では、高拒絶群よりも低拒絶群の方がカンニングに関与する頻度が高かった ($F(1, 117) = 4.81, p < .05$; Figure 5)。さらに、低拒絶群における将来展望の単純主効果が有意であり ($F(2, 117) = 3.13, p < .05$)、多重比較を行ったところ、将来展望の中間群は非統合群に比べてカンニングの頻度が高かった。

考 察

本研究では、拒絶経験と将来展望が非行と向社会的行動に及ぼす影響を検討した。その結果、将来展望の統合性が高い回答者は統合性が低い回答者に比べて向社会的行動によく関与していた(仮説 2-b を支持)。これは、将来展望の統合性が高い少年は教師評価のような潜在的資源を積極的に得ようとするため学校行事に積極的に参加したり、友人を援助したりするような向社会的行動に関与する頻度が高くなったと考えられる。しかし、時間的展望が非行と不良行為に及ぼす効果は全く見られなかった。本研究で扱った非行や不良行為は比較的軽微なものが多く、特に不良行為については経験率が高く、高校時代に一度でも関与したことがある者の割合は 93.9% と非常に高い値であった。こうした軽微な違法行為は、傷害や強盗などの重大な犯罪に比べて発覚可能性や公的制裁も小さいため、それらに関与しても、少年が目標達成のために必要とする社会的資源の獲得を阻害する要因とはなりにくいのではないかと推察される。それ故、将来展望が非行を抑制しなかったのであろう。これまで時間的展望は従属変数として扱われることが多く、特定の行為を予測するための独立変数として扱われることはほとんどなかった。本研究ではこれを独立変数として扱い、向社会的行動との関連が示されたことは新たな知見と言えるであろう。

一方、拒絶経験の効果については不良行為のみに見られたが、これは仮説とは逆に、拒絶経験の少ない回答者のほうが多い回答者よりも不良行為に関与する頻度が高かった。また、補足的な分析では、無免許運転と脅迫についても同様の結果が見られた。こうした結果が生じた背景には、二つの要因が関係しているであろう。第一に、不良行為や非行は単独で行うというよりも仲間と一緒にいう特徴がある(犯罪白書, 2005)。第二に、先行研究との拒絶測定法に関する違いがある。先行研究ではソシオメトリック法を用い、客観的に誰が拒絶されているのかということ測定しており、ソシオメトリック上で拒絶される対象者は攻撃的な少年であることが多い(前田, 2002)。しかし、本研究では自己申告法を用いており、拒絶経験の項目を見ると、陰口や無視のような内容が含まれており、拒絶経験が多い回答者はいじめの対象になっていた可能性がある。こうした二つの要因を考慮すると、自己申告による拒絶経験の多い少年は行動を共にする仲間が少なく、一人で行動する機会が多かったため非行や不良行為のような集団性が高い行為に関与す

る機会が少なかったのではないかと推察される。この結果は、ソシオメトリック法と自己申告法では、非行に対する拒絶経験の効果が異なることを示しており、測定法によって拒絶対象者の特性が異なる可能性があるということを示唆している。実際、Sandstorm & Zakriski (2004) は攻撃的な拒絶児に比べて内向的な拒絶児は自己評価が低かったり、ネガティブな情緒反応が強く、拒絶児のタイプによって内的特性が異なると述べている。拒絶経験が向社会的行動に及ぼす効果は見られなかったが、これは拒絶経験頻度の群分けに際して、サンプル数に著しい偏りが生じたため理論値ではなく中央値 (1.7) を採択したことが原因の一つであると考えられる。理論値上では低群に分類すべき回答者が高群に分類されたために、拒絶の効果を弱めた可能性がある。

非行ではいずれの効果も見られず、交互作用については非行だけではなく、不良行為についても見られなかった。そこで、補足的に各非行・不良行為を従属変数として再分析を行った結果、交互作用効果が喫煙とカンニングに対して見られたが、その効果は一樣ではなかった。これらの結果は、拒絶経験や時間的展望が非行形態に依存して異なった効果を持つことを示唆しており、今後の研究では、非行や不良行為の形態を区別して扱う必要があるだろう。

本研究の制約としては、高校時代の拒絶経験や将来展望、そして同時期の非行と向社会的行動を回答させたため、独立変数と従属変数の因果関係を特定できなかった点にある。また、本研究では高校を卒業した者に回想法を用いて回答を求めていることから、回答の信頼性という点において十分であるとは言い難い。したがって、今後は実際の高校生を対象に拒絶経験と将来展望を非行や向社会的行動よりも時間的に先行して測定する必要があるだろう。

引用文献

- Aron, A., & McLaughlin-Volpe, T. (2001). Including others in the self: Extensions to own and partner's group memberships. In C. Sedikides & M. Brewer (Eds.), *Individual self, relational self, and collective self* (pp. 89-108). New York: Psychology Press.
- 東江康治・石川清治・嘉和朝子 (1984). 児童の時間的展望尺度の作成 琉球大学教育学部 紀要, 28, 237-243.
- Asher, S.R., & Coie, J.D. (1990). *Peer rejection in childhood*. Cambridge: Cambridge University Press. (アッシャー, S. 他 山崎晃・中澤潤 (訳) (1996). 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否するところ—北大路書房)
- Dodge, K.A., Lansford, J.E., Burks, V.S., Bates, J.E., Pettit, G.S., Reid, F., & Price, J.M. (2003). Peer rejection and social information-processing factors in the development of aggressive behavior problems in children. *Child Development*, 74, 374-393.
- 法務省法務総合研究所 (2005). 平成 17 年版 犯罪白書 一少年非行— 国立印刷局
- Hubert, R.J., & Lens, W. (1988). Time perspective, time attitude, and time orientation in alcoholism: A review. *The International Journal of Addictions*, 23, 279-298.
- 家庭裁判所調査官研修所監修 (2001). 重大少年事件の実証的研究 日本評論社
- Levin, K. (1951). *Field theory and social science*. New York: Harper.
- McLaughlin-Volpe, T., Aron, A., Wright, S.C., & Lewandowski Jr, G.W. (2005). Exclusion of the self by close others and by groups: Implications of the self-expansion model. In D.

- Abrams, M. A. Hogg & J. M. Marques (Eds.), *Social psychology of inclusion and exclusion* (pp. 113-134). New York: Psychology Press.
- 前田健一 (2002). 攻撃性と仲間関係 山崎勝之・島井哲志 (編) 攻撃性の行動科学 一発達・教育編一 (pp. 122-134). ナカニシヤ出版
- 菊池章夫 (1988). 思いやりを科学する一向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- Miller-Johnson, S., Coie, J., Manumary-Gremud, A., Lochman, J., & Terry, R. (1999). Relationship between childhood peer rejection and aggression and adolescent delinquency severity and type among African American youth. *Journal of Emotional and Behavioral Disorders*, 7, 137-146.
- Nuttin, J., & Lens, W. (1985). *Future time perspective and motivation: Theory and research method*. Leuven: Leuven University Press.
- Parkhurst, J.T., & Asher S.R. (1992). Peer rejection in middle school: Subgroup differences in behavior, loneliness, and interpersonal concerns. *Developmental Psychology*, 28, 231-241.
- Sandstorm, M.J., & Zakriski, A.J. (2004). Understanding the experience of peer rejection. In J.B. Kupersmidt & K.A. Dodge (Eds.), *Children's peer relations: From development to intervention* (pp. 101-118). Washington, DC: American Psychological Association.
- 白井利明 (1994a). 時間的展望の生涯発達に関する研究の到達点と課題 大阪教育大学紀要, 42, 187-216.
- 白井利明 (1994b). 時間的展望体験尺度の作成に関する研究 心理学研究, 65, 54-60.
- Wentzel, K. R., & Asher, S.R. (1995). The academic lives of neglected, rejected, popular and controversial children. *Child Development*, 66, 754-763.

Appendix. 調査で使った項目

仲間からの拒絶

同級生に無視されたことがあった。

同級生に仲間はずれにされたことがあった。

同級生に陰口をたたかれたことがあった。

同級生に不快なあだ名をつけられたことがあった。

同級生に目の前で自分の悪口を言われたことがあった。

クラスで何かあると同級生は自分を疑った。

たいした理由もなく同級生から暴力を振るわれたことがあった。

同級生に物を隠されたり、とられたりしたことがあった。

自分が悩んでいた時に同級生は誰も相手にしてくれなかった。

同級生から根拠もなく悪い噂を立てられたことがあった。

時間的展望（質的側面：時間的志向性）

私には、将来の目標があった。

10年後、自分が何をしているのか想像がつかなかった。（逆転項目）

将来のためを考えて当時から準備していることがあった。

自分が今やっていることは将来に影響すると思っていた。

進学、就職のことを考えて真剣に努力していた。

時間的展望（質的側面：時間的態度）

自分の将来に希望を持っていた。

自分の将来は自分で切り開いていく自信があった。

将来のことはあまり考えたくないと思っていた。（逆転項目）

自分の将来の見通しは明るいと思っていた。

5年後、自分はきっと幸せに暮らしているだろうと思っていた。

時間的展望（構造的側面）

あなたが高校時代に持っていた夢や目標を思い出せるだけ書いてください（密度）。

何歳で達成できると考えていたかを記入してください。（広がり：回答者の最大値を広がりの指標とした）

上で挙げた夢や目標のそれぞれについて、高校当時の程度、達成可能だと考えていましたか？（現実性）

このアンケート用紙の一番はじめに書いて頂いた「高校時代に持っていた将来の夢や目標」を、思い出せるだけ書いてください。ただし、夢や目標は実現できると考えていた順に記述してください。（構造化）

不良行為

タバコを吸った。

親にことわずに外泊した。

飲酒をしたことがあった。

家出をした。

繁華街で深夜遅くまで遊んだ。

カンニングをした。

パチンコや競馬などの賭け事をした

学校の授業をさぼった。

教師に反抗した。

非行

シンナー等の薬物を使用した。

無免許でバイクや自動車を運転していた。

公共物や学校の備品をわざと壊した。

他人の自転車を勝手に持っていった

人を脅して金や物を取り上げた。

人と殴り合いのケンカをした。

デパートやスーパー等で万引きした。

向社会的行動

友達の悩みを聞いたり、相談相手になった。

生徒会や学級委員のように学校やクラスの運営に積極的に参加した。

他人の失敗を笑ったりしないで励ましてあげた。

友達がケガをしたり具合の悪いときに保健室へ付き添ったり看病をした。

苦しい立場にある友達を親身になって助けた。

悪口などを言われていじめられている子をかばった。

授業を休んだ友人のためにプリントなどをもらった。

学校・地域のボランティア活動に参加した。

友達に勉強を教えてあげた。

学校を休んだ友達にノートを貸してあげた。

クラブ活動や勉強に一生懸命、打ち込んだ。